
防人の詩

由良川成美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

防人の詩

【Nコード】

N2890BA

【作者名】

由良川成美

【あらすじ】

南の地で戦火が上がる時、防人たちは銃を取る。異次元近未来的ミリタリーアクションをここに。

プロローグ

時は二一世紀。東アジアは混沌の迷宮に囚われていた。国家間の軍事的衝突。政治、宗教における様々な思想からなるテロリズム。多くの血が大地と海を染め上げ、多くの毒が空を穢した。

一九九〇年八月。南沙諸島にて、中華人民解放軍とインドネシア国軍との間で、大規模な衝突が発生し、紛争に発展した。これが南沙諸島紛争の始まりである。

近隣諸国は以前から、この地域一帯の領有権を巡って、争っていたが本格的な軍事衝突はこれが初めてだった。

しかし近隣の諸国はこの紛争に介入することを嫌った。中国とインドネシア。どちらかに味方をすれば、彼らの主張する領土を認めたと国際社会に解釈されかねないからだ。

頼りのアメリカは、湾岸戦争後から厭戦気分 of 漂う世論の動向から、派兵については及び腰となっていた。

その後、両国間の紛争は数年続き、一向に解決の兆しを見せなかった。そして二〇世紀最後の年。それは最悪の展開を見せる。

インドネシア国内に拠点を置くイスラム系過激派組織が、中国上海にて小型核によるテロを実行したのだ。使用されたのは旧ソ連製の五キロトンの小型核爆弾で、数万名もの犠牲者を出す大惨事となった。

中国共産党は第二砲兵（核を運用する解放軍の部隊）によるインドネシア全土への核報復を宣言。宣言から数時間後、首都ジャカルタは炎に包まれた。

両国間における全面核戦争から世界大戦への飛び火を恐れた、国連の安保理理事会はアメリカ海軍第七艦隊を主力とする国連平和維持軍の南沙諸島への派兵を決定した。

必死の平和交渉。水面下での継戦派に対する破壊工作——平和維

持軍による南沙諸島とその周辺海域への展開により、東アジアが核の火に包まれるのを何とか回避した。

だが和平交渉は核による先制攻撃を被った中国が主導する形となり、南沙諸国の領有権は中国が全面的に掌握するに至った。

そして問題はそれだけではなかった。イスラム過激派が核による民間人の大量虐殺を行ったことにより、一般のムスリムへの弾圧が国際規模で発生したのだ。

この動きは、中国に南沙諸島の領有権を奪われた東南アジア諸国で多く見られた。そして二一世紀初頭。再び悲劇が起こる。インドネシア国内でキリスト教徒によるムスリムの少女に対する婦女暴行殺人事件が発生したのだ。

その事件の様子はインターネットの動画共有サイトにアップロードされ、一二歳前後の少女が凌辱の末、チェーンソーでバラバラにされるその動画は、さぞかし世界中の人々に嘔吐を催させたことだろう。

ここからムスリムとイスラム教徒による宗教戦争に発展——これがインドネシア宗教戦争である。この戦争における死傷者は休戦同意に至るまでに二万名近くにも及んだ。

それ以来、宗教問題に起因するテロリズムの波が、東南アジア諸国に波及し、深刻な国際社会問題に発展した。

アメリカは東南アジアでの治安回復の大義名分のために、東アジア圏における米軍の増援を決定した。アメリカ国内の世論もこの時ばかりは、ホワイトハウスのこの政策を支持した。

だがこれにより多くの米軍基地を有する日本の——とりわけ沖縄への負担が著しく大きくなる結果となった。

さらに沖縄での対米感情は決して良いとは言えなかった。これは長年、政府と米国の基地政策に頭を悩まされてきたこともあったが、つい最近、米海兵隊の兵士による少女暴行事件が発生したばかりだ

つたのだ。

他にも中国の軍事力の増強や、北朝鮮の核問題など、多くの問題を抱える東アジアに、救いの光が差し込むのは何時なのだろうか。

FPS（二足歩行型の戦闘用強化外骨格）の操縦席は、とにかく狭い場所だ。しかも正面と左右にあるモニターと、計器類以外の光は無く、異様な圧迫感を覚える。FPSの操縦士を養成する課程では、それが原因で脱落する者も多いと聞く。

全高四メートル、乾燥重量二トン、全備重量四トン、攻撃ヘリのコックピットのキャノピー部分を全て装甲で覆い、手と足を付けたような一四式戦闘外骨格の操縦席で、フォックス3のコールサインを持つ高坂幹弘（こうさかみきひろ）一等陸曹はテッパチと呼ばれる八八式鉄帽に備えられたHMD——ヘッド・マウント・ディスプレイの位置を少し調節した。このディスプレイはAH64攻撃ヘリコプターのガンナー（射手）が装備するものと同じような形状をしていた。

彼の年齢は二一歳。しかし年齢の割には幼い風貌をしている。しかしその両眼は鍛え抜かれた兵士の眼光が灯っている。

「こちら指揮車」

無線のイヤフォンから女の声がする。後方に展開している八八式指揮通信車の中で指揮を執る葵風子（あおいふうこ）三等陸尉だ。幹候（幹部候補生学校）を卒業したばかりの初任幹部で、A幹だった。

A幹とは防衛大学を卒業した幹部のことを指す。また一般入隊で陸曹に昇進した後に、各試験を受験し幹部に昇進したものをB幹、一般大学から幹部候補生学校に入学したものをC幹と呼ぶ。

「現在、敵勢力一個小隊約二〇が市街地より離れた山間部にある洋館に潜伏している模様。なお敵は生物化学兵器を保有している可能性が高いと、情報筋からの報告があった。今作戦の目的は敵テロリストの殲滅と生物化学兵器の奪取にある。武運を祈る」

高坂たち一四式の操縦士はそれに応える。

「フォックス1了解」

フォックス1は真鍋将太（まなべしやうた）陸曹長で、小隊の実動部隊であるフォッ

クスチームのリーダーだ。戦闘においては突撃を担当する。

「フォックス2了解」

フォックス2こと雁屋琴音^{かりやことね}二等陸曹だ。戦闘では重火力による支援を行う。

「フォックス3了解」

高坂は真鍋と同じく突撃を担当する。

「フォックス4了解」

フォックス4は三山武光^{みやまたけみつ}三等陸曹だ。これもまた同じく突撃を担当する。以上四名が、特殊機械化小隊の前衛を担当するフォックスチームのメンバーだ。

「カウントを開始する。突撃五秒前、四——」

真鍋のカウントを聞きながら高坂は言い知れぬ高揚感を覚えた。

「三、二——」

ゆっくりと息を吐きながらジョイスティックを軽く握る。FPSの操縦方式は二本のジョイスティックと二本のラダーペダルによって行われるシンプルなもので、ボイスコマンド入力採用と基本動作の自動化によって、操縦士の負担を軽減する形を取っている。

「一——」

次の瞬間、高坂は前進の血液が沸騰したような錯覚を覚えた。

「状況開始！」

四体の一四式がブッシュから飛び出す。足裏に装備されたホイールで加速する。このホイール走行での最高時速は一〇〇キロメートルだった。

「前方に大型車両を確認——旧ソ連製BMP T装甲戦闘車両。数二」指揮車からの情報に高坂は軽く舌打ちした。敵の戦力は一個小隊程度だと言ってなかったか？

そうこうしている内に、敵のBMP Tからの攻撃が始まる。高坂は二門の三〇ミリ機関砲からの掃射を受けた。何発かが当たり、高坂は、ぐっと呻いた。

こちらにも二五ミリ速射機関砲で応戦する。しかし当たらない。敵

の三〇ミリ砲からの掃射でフォックスチームは完全に釘づけにされていた。

「こちらフォックス2、重火力支援を開始します」

高坂たちより後ろにいた雁屋はタッチパネルのディスプレイを操作し、敵の戦闘車両にロックオンをする。

雁屋は左肩部に積載されていたミサイルランチャーから、直径一八センチ、全長一八五センチの〇八式対戦車誘導弾が二発、発射された。そして前方のBMPが派手な火柱を上げ攔座した。

「ランチャーを切り離します」

雁屋は用無しとなった空のランチャーを捨てた。そうしている内に目的地である洋館が見えてきた。

すると真鍋の一四式の左肩部が、激しい閃光と共に爆ぜた。敵からの攻撃だ。ヘッドセットから無機質な声が響く。

「前方の洋館の屋上に敵テロリスト三名を視認。RPG対戦車口ケット砲を携帯している模様。低圧砲による掃射を開始します」

雁屋は右の肩部に搭載されている九〇ミリ低圧砲から炸裂弾を発射した。炸裂弾は屋上の上空で、TNT炸薬の花火の花を開かせた。

「テロリストの殲滅を確認」

「こちらフォックス1了解。フォックス3、4へ。これより敵の潜伏する洋館の内部に突入する」

真鍋は一気に洋館との距離を詰める。高坂と三山もそれに続いた。そして背面に搭載された二発の小型ジェットエンジンの力で、一気に洋館の屋上に上がる。

しかし屋上に着陸した三山の一四式が、バランスを崩し、地面に叩きつけられた。

「こ、こちらフォックス4！ 申し訳ありません！」

三山は慌てながらも、再びジェットを焚き、屋上に向かった。

それからチームは三山の到着を待ち、それから屋上の床に弱装爆弾を設置し、起爆させる。建物全体に負担がかからない程度の大穴が、四つほど開いた。

「全機突入態勢」

真鍋は鋭く言った。高坂たちは二五ミリ速射機関砲の引き金に指を掛けた。これでワンアクションでの射撃が可能だった。

「突入！」

暗いその穴蔵はまるで、別世界への入り口のようにだった。真鍋の号令と共に高坂たちはその中に身を投じた。

その中は薄暗く、肉眼では全容が把握できない。しかし一四式に搭載されたFLIER（赤外線前方監視装置）が極めて明瞭な視界を提供してくれる。

狭い屋内ではホイールによる高速移動は出来ないので徒歩で進軍するしかない。一定のリズムのある振動が操縦席に響く。

「生物化学兵器の容器と思われる物体を確認。場所は地下二階の東側、右から二番目の広間です」

指揮車の分析員の声がヘッドセットに響く。その広間は高坂が今いる場所から見えて、ちょうど真下にあった。高坂は一四式のバックパックから再び弱装爆弾を取りリーダーすと、適当な場所に設置する。「こちらフォックス3、広間に突入する」

言うが否や、土煙が上がったかと思うと、床が音を立てて崩落する。その床と共に下へ落下すると、目の前にドラム缶大の容器があり、その周りにはテロリストが数人いた。高坂は容器を傷つけないようにテロリストのみを狙い撃ちする。もちろん機関砲の弾頭は炸裂弾から通常弾に切り替えて、だ。

血飛沫が飛び、肉片が舞った。

指揮車の葵は、状況をディスプレイで把握していた。ここにはフォックスチームの一四式の頭部に搭載されたCCDカメラからの情報や、各機の機体や操縦士の状況を収集、分析するシステムが導入されている。

「小隊長。無人ヘリからの情報で、テロリストの全滅を確認しました」

オペレーターが言った。

「シミュレーション終了。VRシステムダウン。整備班は各機の戦闘データの処理を急げ」

葵は言った。

正面と左右のモニターがブラックアウトし、操縦席は一瞬間に包まれたが、すぐにモニターからの光が灯る。

そこにはFLIER画像特有の青白い視界ではなく、通常のカメラ画像が映っていた。さっきまで足元に転がっていたテロリストの死体は無く、代わりにつなぎを着た整備士たちが慌ただしく走り回っている。

全ては虚像の産物だった。失敗すれば生死に関わること以外は、まるで本物の戦闘を経験したかのようなだった。

高坂は、一四式のコックピットのハッチ（人間で言う所の胸の部分にコックピットが収まっている。頭部はフレームの剛性を稼ぐために無い）を開け、外に降り立った。

真夏の陽光で熱せられたプレハブ建ての格納庫の中は、まるでサウナの中にいるような暑さだったが、蒸し風呂の中で激しい運動をしているような、一四式の操縦席に較べれば天国のようにさえ感じられた。

「ようし！ 模擬戦のデータの処理急げ！ さっさとしろ！ だらける野郎は全員、那覇湾に放り込むぞ！」

整備小隊長の緒方浩司おがた こうじ陸准尉の怒鳴り声が格納庫内に響く。その怒鳴り声に耳を痛めながら、高坂は地面に降り立った。

FPSの歴史は九〇年代初頭に、アメリカで研究開発が進められていた兵士個人が装備する強化装甲服に始まる。

しかし歩兵に不足する火力と防御力を補う目的に作られた装甲服だったが、これをすべての歩兵に装備するとなると、莫大な整備、運営に支障をきたすことから、一個小隊に一個ずつ程度の数しか配

備することが出来なかった。さらに歩兵に随伴する機動力以外は無能に等しく、中途半端な装甲と火力の強化装甲服を着用させた兵士よりも、戦車を随伴させたほうが、どれほど心強いかわからないというのが、現場の兵士の本音だった。

そこでアメリカ軍の上層部は、日本の大手企業との共同で、軍用二足歩行大型多目的外骨格、通称「FPS（Fighting Powered Suit）」の開発に踏み切った。

その後FPSは、より強力なC4Iシステムが導入されたことにより、現代戦の代名詞でもある「ネットワーク中心の戦い」に対応出来るようになっていく。

駆動部分には高性能モーターと人工筋肉。そしてホイールが採用し、整地不整地問わず、優れた走破能力を備えているものもある。

現在では日本やアメリカだけではなく世界各国で研究と開発が進められ、現在では戦車に次ぐ陸戦兵器の主役となっている。

高坂たちの隷属する機械化小隊は、沖縄に駐屯する陸上自衛隊第一五旅団の第五一普通科連隊隷下の機械化中隊の一部隊だ。

那覇市内にある駐屯地の敷地内にある営舎の一室に、高坂たちは集められていた。夏の日差しが、空調機の奮闘を嘲笑うかのように、営舎に降り注ぐ。

フォックス1の真鍋、フォックス2の雁屋、フォックス3の高坂、そしてフォックス4の三山……その他にも、第一機械化小隊小隊長の葵や整備小隊長の緒方が席に座っている。まるで学校の教室のようだな。高坂はどうでもいいことを考えた。そして目の前の教壇には、三等陸佐の階級章をつけた男が立っていた。男の名は神崎正平かんさきしょうへい。機械化中隊の中隊長だった。

自衛官というよりはヤクザの風体に近い神崎は口を開いた。

「一四式の戦闘シミュレーションを行った訳だが、だいぶもたついてきたようだな？」

いきなりぐさりと言った。

「実戦なら死ぬレベルだぞ」

するといきなり、席の最前列で、せかせかと何事かをメモ帳に書きなぐっていた葵が、急に立ち上がって、視線を中空に向けて、早口で喋り始めた。

「今回の演習によって、我が小隊には重大な問題点が生じていたことが浮き彫りとなる結果となりました。この不手際は私に一切の責任があります！ここに中隊長に対してお詫びを申し上げます！」

そう言って腰を九〇度に曲げた。突然のことに神崎はポカンとしている。——いやそこまで言っていないぞ。と神崎が言う前に、葵は真鍋と緒方に向き直った。

「それで最先任上級曹長と前任上級陸曹長は、今回のここまで問題が生じた背景には、部隊の技術的問題があると思うか？それとも一四式の構造自体に何かの欠点が生じたと思うか？それとも訓練の内容に誤りがあったかと思うか？」

「は、はあ？」

何故そこまで話が大きくなるのか。そもそもさっき「一切の責任は自分にある」と言っただけではないか。その場にいる全員が呆れかえった。

「いや、問題を連隊長と旅団長に報告するにあたって、中堅の陸曹の意見を取り入れた方が良さだろう？」

葵は懲りずにまた言った。無責任な真面目気質な人間ほど、口くさなものはないな。

「それは……連隊長か中隊長の命令で？」

真鍋は神崎の方をちらりと見ながら言った。神崎は肩を竦め、否定の意を表した。

「命令は受けていない。規則に則った行動だ」

葵は胸を張って言った。まあこんなアホらしいことを命じるような、人たちではないだろうな。すると横にいた緒方が最大限の営業スマイルで言った。

「お言葉ですが……私の経験上では、この程度の問題は部隊内で処

理する程度のモノなんですよ。そんな大事にするほどではありません
んよ」

もし連隊長だけではなく、旅団司令部にも話が伝われば、この小隊だけではなく、下手をすれば連隊全体の評価にも関わってくる。その辺の匙加減は、実際に部隊で揉まれている内に覚えるものなのだが……。

「し、しかし！ 部隊で起こった問題は——！」

平均よりも幾分、いや、かなり低い身長の詳細をいきり立たせながら、葵はヒスメリックで喚き立てた。

—— 黙ればかわいい残念メガネ娘。胸の割に背と器の小さいヒステリー女。歩く妖怪教本女。規則大好きチキン野郎——防大を卒業し、幹部候補生学校を出たばかりの初任幹部は、融通が利かず、バカンプ（馬鹿な幹部）と陰口を叩かれるものだったが、それにしても着任してから数週間でここまでの渾名を受け賜わるとは珍しいことだ。

すべて規則どおりにすれば部隊は動くものであり、それが真理である。この考えに逆らう者は一切許さない。そんな考えが、常日頃の言動から滲み出ているのを、真鍋は職務を手助けしている中で感じ取っていた。

小娘が調子に乗るなよ。そんな物騒な言葉が真鍋の喉仏まで差し掛かった時、部屋の戸が開いた。そちらに目を向けると、そこには第五一普通科連隊連隊長の奄美竜司^{あまみりゅうじ}一等陸佐と——

「か、神山旅団長！」

神崎が驚きの声を発すると、部屋にいた全員^{かみやまのぼる}が席を蹴って、直立不動で敬礼した。第一五旅団の旅団長。神山昇陸将補は、軽く答礼しながら、楽にするよう手でまあまあと皆を諫めた。

「いや……少し私用でこっちに來たんだがな？ どうも穏やかではない感じがしてね？」

神山のおっとりとした口調で喋っていたが、真鍋と緒方たちは首筋に剃刀の刃で撫でられているような心情だった。まさかこれで部

隊の評価が下がるようなことはないだろうな。気が気でなかった。

「えーと葵……三尉だったかな？」

「は、は！」

中空に視線を向けながら、葵は裏返った声で言った。もう泣きそうな表情だ。しかし神山はそんなことには構わず、失礼、と葵の机の上にあつたメモ帳を拾い上げた。

そして奄美にもそれを渡した。

最悪の事態を予想した真鍋は、別にキリスト教徒でもなかったが、胸の中で十字を切った。緒方も覚悟を決めた。

神山はしばらくメモ帳に目を通していたが、やがて言った。

「奄美連隊長。どう思う？」

しばらくメモ帳に眼を通した後、奄美は答えた。

「は、これは……」

部屋の温度が、二度低くなった気がした。

「大した問題ではありませんね」

「うん、そうだな。勤労なのは評価するが……こんなことでいちいち報告を入れられたら、師団司令部の通信士は過労死しちゃうよ」

そう言つて神山はメモ帳を葵に返した。恐らくその場にいた葵以外のほとんどの隊員が、胸の内で胸を撫で下ろしたことだろう。

「じゃ、お邪魔したね」

神山は何事もなかったかのように立ち去つて行つた。部屋が嵐の過ぎ去つた直後のような静けさに包まれた。

葵は唇をワナワナと震わせている。それは旅団長との対面による緊張が未だに解けていないだけではないはずだ。

「あー、葵三尉？」

静けさを最初に破つたのは神崎だった。

「報告会はこれで解散にしたいんだが……いいか？」

屈辱にまみれた表情で葵は、はいと身を震わせながら返事した。

「よし、解散！」

神崎はそう言つて手を打つと、部屋を出ていく。

「中隊長に敬礼！」

しばらくは再起不能であろう葵に変わり、真鍋が言つと、高坂たちもそれに続いた。

唇を噛みしめながら、うつむいていた葵だったが、やがて机の上の筆記具をひつたくるように掴むと、部屋を出ようとした、その時だった。

「いちいちヒステリー起こすなよな」

それはひどく明瞭に聞こえてしまった。葵は紅潮させた顔をこちらに向け、怒鳴り散らそうと――

「誰だ！ 今のは！」

高坂は教室の後ろの整備小隊の隊員たちに向かって怒鳴った。すると一人の若い陸士が直立不動で中空に視線を向けた。

「自分でありませう！」

彼は小酒井満陸士長。整備小隊の陸士のまとめ役のような存在だった。口より早く手が出るような男だったらしいが、それでも緒方の「教育」のおかげでだいぶ丸くなったらしいのだが……

「あとでうちに顔を出せ！」

高坂がそう凄むと、小酒井は、了解しましたと敬礼した。部屋の戸の方を見ると、すでに葵の姿は無かった。

その後、整備小隊の整備を手伝い、それが終わった頃には日が傾いていた。あれから葵は小隊長室に閉じこつたままだが、大丈夫なのだろうか。ちなみに小酒井は腕立て五〇〇回の刑に処した。

指導のための拳骨が暴力だ。体罰だ。人権侵害だと騒がれるようになった久しいこの時分、腕立てはこの部隊でも大変に重宝されていた。

高坂と真鍋、そして緒方は屋上に来ていた。

「さつきはすいません。余計なことを……」

高坂は、緒方に謝った。小酒井は緒方の直属の部下だ。いくら高

坂が上官だと言っても、これは越権行為になる。

「別にいいわ。そんなもん」

緒方はそう言って煙草に火をつけた。そして二人にも煙草を勧めた。二人はありがたく頂戴した。煙草の紫煙が夕焼けの空に昇る。高坂は先任上級曹長付陸曹として、真鍋のもとで働いている。

最先任上級曹長、もしくは先任上級曹長というのは、陸上自衛隊において曹士の能力活用の一環として採用された制度で、上級陸曹の活動を推進し、部隊の運用の効率化を狙ったものだ。

ちなみに緒方は連隊長付最先任上級曹長として、連隊長の奄美を補佐し、真鍋は中隊付先任上級曹長として神崎を補佐する立場にある。

「まあ、俺たちもこれ以上、面倒事はごめんだしな」

真鍋も言った。緒方たちにこれ以上、負担を駆けさせたくないが故の行動だと分かっていたからだし、若干二一歳にして異例のスピードで一曹に昇任した高坂の気苦労も分かっていたからだだった。

「それよか、今回の演習はちよいと酷かったんじゃないか？」

緒方は話題を変えた。

「来月には本土の連中とアメ公との共同演習だ。このままじゃあ恥かきかねないぞ」

いくら新兵器の扱いに手慣れていないとはいえ、コンピューターの予測では一〇分前後で終わるはずだったシミュレーションが、実際には倍以上もの時間が掛かったのは、ただけなかった。

「今まで扱っていた九七式と比べて反応が敏感すぎるんですよ一四式は。ここから歩兵と戦車との共同作戦のことも考えるのとなると正直頭が痛くなってきますよ」

珍しく真鍋は弱音を吐いた。眼は疲労で充血している。高坂も黙り込んだ。重い空気が漂い始めた。緒方は話題の切り替えの失敗したことを後悔した。

「まあ、まだ始まったばかりなんだし、そつ気に病むことは無いだろつさ」

言い出しつpegが何を言つとんだ。緒方は自分をなじつたが、他にどうしようもなかった。そして場の空気を明るくしようと、またわざと明るい声を出した。

「よし、今晚飯でも――」

食いに行くか。と緒方が言おうとした時、屋上のドアが勢いよく開いた。

「貴様ら！　ここで何をしている！」

葵だった。先ほど前まで泣きそうになっていたのが嘘のような態度だった。こちらが直立不動の姿勢を見せると、続けて言った。

「指定された場所以外での喫煙は禁止されているのだぞ！」

「申し訳ありません！　以後、気を付けます！」

緒方が言つと、葵はフンと鼻を鳴らした。

「まあ今回は大目に見てやる。次は無いぞ」

そう言つて勢いよくドアを閉め、またどこかに消えた。

しばらくして緒方が口を開いた。

「……あれで恩を売つたつもりか？」

「さ、さあ……」

真鍋と高坂にも分からなかった。

――ふと空を見上げた。普段とは違う空模様だ。台風が近いうちにこのあたりへ上陸するとテレビでも言っていたし、心配だな。

赤道直下に位置するこの国は、今なお国民の宗教観の相違により、小競り合いが絶えなかった。その埃と病根を映し出すかのように、今日も強い日差しが照りつける。

南沙諸島紛争の際の被害が他と比べても少なかったインドネシアの南カリマンタン州にある町の南端の倉庫で、十数人の男女が集まっていた。

それは二つの集団に分けられている。一方はこの国の民であることは肌の色を見れば明らかだったが、もう一方は有色人種に違いないが、明らかに肌の色も顔つきも違う。

双方が小火器で武装し、互いに睨みを利かせている。とても「友好的」な雰囲気ではなかった。

「お望みの品だ。扱いに注意しろよ。商品の管理はうちの業務だがな、売った後のアフターサービスは受け付けないからな」

英語でインドネシア人たちのグループの長の男は言った。そしてもう一方の異邦人側の長なのである黒髪の長髪の女が、「それ」を受け取るうとした時、倉庫の上空から、かすかだがレスプロ機のエンジン音が聞こえた。

「UAV！」

黒髪の女が鋭く言うと、インドネシア人は慌てて、シートのようなものを被った。もし国連軍の有しているUAVならばFLIR（前方赤外線監視装置）で発見されかねない。このシートは対赤外線効果のある材質で作られていた。

「お、おい！ あんたらも早く隠れろ！」

インドネシア人の男は言った。しかし異邦人たちは隠れるどころか、慌てる素振りさえ見せない。そして女は言った。

「大丈夫ですよ。このあたりのUAVのフライトプランは全て頭に入っています。ここには飛んできません」

女は大変にこやかに言った。こいつは何を言ってるんだ。インドネシア人たちはそれに気付く前に、五・五六ミリNATO弾の洗礼を浴びた。

――裏切られた。しかしそれに気付いた時、彼らはすでにこの世の住人ではなかった。血生臭いにおいが、鼻を突く。

悪夢は突然に少年を襲った。ルデイ・オスタンは数十メートル先に見える倉庫で「取引」が行われている間、この辺を警備する集団の中にいた。

ルデイたちはイスラム系のテロ集団だ。昨今の東南アジアにおけるムスリムの弾圧に対抗するべく組織された、小さな組織だったが、彼らには一つの国を滅ぼしかねない力があつた。――核兵器だ。旧ソ連製の小型核爆弾で、リュックサックに収まる程の大きさだったが、二〇キロトンの威力があつた。

合計三発保有していた。その内の一発を数億ドルである組織に、売り渡す予定だ。彼らが活動するためには、とにかく資金が必要だったからだ。

この「取引」が上手くいけば、しばらくは金に困ることもないだろう。ひよつとすればその恩恵を家族にも恵ませてあげられるかもしれない。家で待つ両親と、七人の弟と妹のことを思いながら、そんなことを考えた。

すると空の向こうから何かが、こちらに飛んできた。

敵か？ しかしそれはラジコンの飛行機だった。ラジコンは低空で倉庫の上を通り過ぎた。すると倉庫の中が何か騒がしくなったかと思つた途端、銃声が響いた。

まさか取引が失敗したのか。ルデイたちは急いで倉庫に向かった。その瞬間、道端に設置されていたクレイモア指向性対人地雷が作動した。

クレイモアに収まっていた七〇〇程の鉄球が、C4炸薬のエネルギーによって撒き散らされ、彼らを粉碎した。

茂みの中から、擬装を施した夜戦服を着た数人の兵士たちが現れた。その中の赤い短髪の少女が、手に持っていた無線機に向かって言った。

「外のガードは無力化したで」

了解したと無線機の向こうからの言葉を聞きながら、少女は周りを見回した。そしてテロリストたちの死体——肉片の中で何かが蠢いたのを見つけた。自分の背丈の半分もない少年だった。いや正確には「自分の背丈の半分ぐらいになった」少年だったが。

少年の胴体は臍のあたりから下が吹き飛んでおり、上半身だけが辛うじて生きている状態だった。

ピンク色の泡を蟹のように口から吹きながら、胴体の断面から飛び出した自分の臓物を必死になって掻き集めていた。

少女は肩をすくめると、少年に近づいた。少年はやつとこちらに気が付いたようで、凄まじい形相でこちらを睨んでくる。それは恨みと恐怖が入り混じった表情だった。

少女はしゃがんで、ホルスターからトカレフ拳銃を抜くと、少年の額に銃口を押しつけた。そして言った。

「すまんなあ」

乾いた音が、赤道直下の空に空しく響いた。人類現代史始めって以来の、数億、数兆、数京回目の銃声だった。

「あー、もしもし？」

少女は再び無線機に向かって言った。

「すまん訂正するわ。今、全滅させたわ」

銃声が響く。ここは南カリマンタン州の街中にあるイスラム系過激派組織の、アジトの一つだった。

「クソ！ 何なんだ。あいつは！」

この組織のリーダーの男の隣でテロリストの一人が叫んだ。そしてAKの弾を撃ち尽くし男は、慌てて床にばら撒いてあるバナナ

上のマガジンを掴む。が、空であることに気付き、すぐに放り投げた。

「おい、早く弾を——！」

よこせ。と言おうとして男は絶句した。後ろでマガジンに弾を込めていた少女が倒れていたのだ。顔面の真ん中を撃ち抜かれ、風穴が開いている。どう見ても即死だった。

敵はもう向こうの廊下に迫っていた。敵はたった一人だ。にも関わらず、奴は三〇人以上いたこちら側の兵力をほとんど全滅させた。奇襲で不意を突かれた。と言ってもこれはひどかった。

「投降するぞ」

男はリーダーのその言葉に耳を疑った。リーダーは南沙諸島紛争からの筋金入りのテロリストで弱音を吐くような男ではないからだ。「そ、そんな！ 異教徒どもに膝をつくと？」

男はリーダーに食ってかかった。慌てて周りの仲間たちが男を取り押さえた。

「これ以上の戦いは無益だ」

しかし男は食い下がった。

「敵に辱めを受けるぐらいなら、いつそ地下の『あれ』で——」

「ところがどっこい。私たちは『それ』が欲しいんですよ」

異邦の訛りの混じった少女の声はそう言った。次の瞬間、ドアに三つの大穴が開き、先ほどまでリーダーに食ってかかっていた男の上半身が吹き飛んだ。男を羽交い絞めに使っていた男たちも、もれなく肉塊に変わり果てた。

「いやあ、ごきげんよう！ テロリストの皆様！」

大変、陽気な感じで部屋の中に入ってきた敵兵は言った。腕にはセミオートの二〇ミリ口径の対戦車ライフルが抱えられていた。リーダーは忌々しげに、両手を上げながら、その敵兵——茶髪のポニテールの少女を睨みつけながら言った。

「何が目的だ」

リーダーの言葉に、少女はまったくもう。といった感じで、対戦

車ライフルの引き金を引き絞った。リーダーの右の前腕の中ほどが根元から吹き飛んだ。

「もー、人の話はちゃんと聞いてくださいよお」

装薬のガス圧で薬室から二〇ミリ弾の薬莢が宙に舞う。

「我々の目的は、ここにある核爆弾ですよ！ さあ、早く出して下さい。面倒なことは嫌いなんです！」

リーダーは歯噛みしながらも、分かったと了承した。すでに他の仲間全滅しており、他の拠点からの増援を待っていれば、出血多量で自分は死ぬだろうし、そうでなくとも少女の姿をしたこの悪魔は、のんびりそれを待つてくれるとは考えにくい。それに――

「ただし、条件がある」

リーダーは失血で薄れそうになる意識を保ちながら言った。

「はい、何でしょう」

「この部屋の隣には、戦争で親を失った孤児がいる。あの子たちは見逃してはくれないか？」

すると少女は合点がいったという顔をした。

「それでさっきは、あっさり投降しようとしたんですね。意外と優しい方なんですね？」

「……最後に残った両親というやつだよ」

少女はふーんという顔をした。

「分かりました。じゃあチャンスは上げましょう」

「ありがとうございます」

そう言ってリーダーは懐から錆びついた鍵を出すと、少女に投げ渡した。

「この部屋を出て、突きあたりの右に地下へ続く階段がある。そこを下りた所に核爆弾のある地下室がある」

「はい、ありがとうございます」

次の瞬間、リーダーの男の頭が吹き飛んだ。

それから少女は、地下室に足を運んだ。リーダーが言った通り、目当ての小型爆弾を見つけた。一個で三〇キロ以上の重量があった

が、二個とも軽々と持ち上げてみせた。それから脱出しようとアジトの出口に向かったが、何かを思い出したように、額を掌で軽く、ペチンと叩いた。

脱出する前にアジトを爆破するよう言われていたことを思い出したのだ。そしてバックパックからC4プラスチック爆弾の塊を取りだすと、それを適当に切り分けると、建物の支柱に設置し始めた。「ああ、そうだ」

少女はそう言って、ある部屋に足を運んだ。あのリーダーが言った通り、そこにはまだ幼い少年や少女がいた。

「そうですね。私は言いましたね」

少女はホルスターから四五口径のジェリコ941を抜いた。そして何を思ったか、少年たちの両足に向かって引き金を絞った。絹を裂くような悲鳴が部屋を満たす。

「チャンネルを上げるって」

それから少女は重い対戦車ライフルを捨てると、部屋から出ていこうとしたところで、後ろを振り返り、少年たちに向かって言った。「この建物に爆弾を仕掛けました。その足じゃあ、ちよつと無理かも知れませんが、頑張つて逃げてください」

そしてウインクすると出口に向かった。後ろからは哀願の悲鳴が聞こえたような気がしたが、気のせいだろう。

すると出口の方で何か怒声が聞こえた。恐らくは敵の増援なのだろう。少女はやれやれと首を振ると、何の躊躇いもなく窓から飛び降りた。三階の高さがあつたにも関わらずだ。

普通なら重傷は避けられないのだろうが、少女は難なく地面に着地し、何事もなかったかのように走り出した。無論、両脇に核爆弾を抱えてだ。

通行人たちは少女に怪訝な視線を送ったが、それも目の前の建物が轟音と共に崩れ去るまでだった。

ちようと近所では道路整備の工事が行われていたので、建物の中での銃撃戦での銃声は聞こえなかったようだ。いきなり五階建ての

テナントビルが吹き飛んだのだから、驚かない方がおかしいだろう。しばらく走ってから、少女は後ろを振り返った。土煙と黒煙がもうもつと吹き出していた。

そして言った。白々しく、身勝手に、傲慢に。

「ごめんね」

男の名前は木原博。フランス陸軍外人部隊の上級伍長だ。今、木原は東南アジアのPKOの一環として、インドネシアに派兵された部隊の一員として任務に従事していた。

厳しい日差しが照りつける中、インドネシアのジャカルタ港には多数の船舶、軍の艦船がひっきりなしに、往来していた。数年前、核攻撃によって壊滅したとは、想像もできないぐらいの賑わいだっ

た。
木原は、思い出したように腕時計に搭載された放射線量測定器によつて、放射線量を測定した。ここに派兵されてから何度も繰り返していた行動だった。仲間からは神経質だとからかわれていたが、それでもこの癖を止めることは出来なかった。

本物の兵士は常に死に対して恐れを抱き続けるものだ。陸上自衛隊の陸士時代のレンジャーの教官が言っていたことを思い出した。

本物の軍隊に入る。そして多くの人を助けたい。

そんな単純な正義感から温室のように安全な日本を飛び出し、フランス陸軍外人部隊に入隊した木原だったが、多くの任務に従事している中で、宗教、思想、テロリズムなど多くの問題や、戦場における加害者と被害者の区別が曖昧な現実に向面した。

そして正義や大義といったものが戦場では、ほとんど無意味であり、多くの兵士にとって、重要なものは正義でも大義でも、ましてや金などでもない。生き残りたいという生存本能が兵士に引き金を絞らせるのだと悟ると、あのレンジャー訓練時代の教官の言葉を度々に思い出した。——あの教官は今でも元気なのだろうか。

そんなことを考えている時だった。ふと目の前に停泊している大

型貨物船の甲板に目を向けると、えんじ色のワンピースを着た長い黒髪の少女がこちらを見ていた。

しばらくして少女は笑顔で木原に向かって手を振った。

しばらくはポカンとしていた木原だったが、破顔して両手でそれに応えた。貨物船が汽笛を鳴らして出航の合図を出すと、少女が船橋に姿を消すまで、木原は手を振りつづけた。

自分のおかげであの子は今日も、笑顔でいられたのかも知れない。そんなクサイことを思いながら木原は防弾ヘルメットの顎紐を締め直した。そしてフランス軍が正式採用している自動小銃、FAMASを肩に吊るして、港の南端にある警備指揮所に向かった。

実はあの少女が着ていたワンピースが白かったこと、それがえんじ色に見えたのは、「元の乗組員だった」者たちの血で汚れていたからなのだが、そんなこと木原に分かるはずがなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2890ba/>

防人の詩

2012年1月9日18時53分発行